

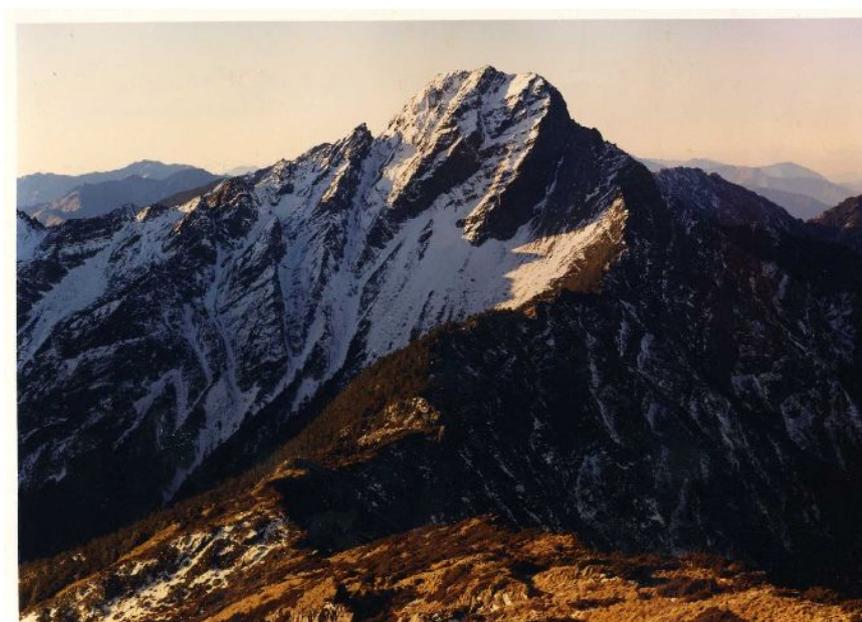
春日井峠の会 創立20周年記念海外登山

台湾・玉山 (3,952m)

<期間> 1991年8月17日～23日

<参加者> [任務]

| | | | |
|--------------|--------------|------------|----------|
| 渡辺 光雄[隊長] | 小倉 龍彦[副長・渉外] | 小倉 恵[食料] | |
| 村瀬 実[装備] | 黒瀧 信夫[医療] | 小林 万貴子[食料] | |
| 高橋 忠彦[副長・記録] | 北村 隆[装備] | 鮫島 重幸[記録] | |
| 村瀬 テトエ[食料] | 黒瀧 友江 | | |
| 小倉 千枝(10) | 小倉 穂高(7) | 村瀬 雄一(9) | 黒瀧 直(12) |
| 黒瀧 恵(10) | 黒瀧 真(6) | 鮫島 暁(9) | 鮫島 萌(6) |



玉山

台北へ

8月17日(土) 晴

<7:30> 名古屋空港集合。異様に大きなザックを背負った子連れこ連れの集団なので、かなり目立っている。アルパイン・ツアーサービス社の大島さんより、搭乗券とパスポートを受け取り、最終的な確認事項を聞く。荷物のチェック後、本田ファミリー、掛布ファミリー、鮫島母、花房氏の見送りの中、出国審査に向かう。全員無事通過、待合室へ。

黒瀧、小倉にて、中華民国山岳協会(中山協)と周文さん(天一旅行社)へのお土産を免税店で購入する。(サントリー“山崎”)

出発時刻が迫り、専用バスで搭乗に向かうが、子供達、特にうちの千枝と穂高は飛行機が初めてで、かなり舞い上がっている。私はどちらかと言えば苦手なほうで、何度乗っても離着陸の瞬間が気持ち良くない。

<9:20> 定刻出発。(日本アジア航空283便)

離陸の瞬間、私は手に汗握り、子供たちは歓声をあげる。機内食が配られる頃にはようやく緊張感もとれ、さっそくビール片手に食らいつく。なかなかイケル！

食事後も子供達は、機内でもらった飛行機のプラモデルを組み立てたり、ヘッドホーンで音楽を聴いたり、窓の外を眺めたり、自由に楽しんでいる。私はというと、出入国カードの記入に頭を悩まし(ビールで少し思考能力が鈍っている)、とうとう着陸寸前まで筆を走らせていた。

<11:40> 台北(中正国際機場)着

入国審査を済ませ、荷物を受け取る。登山用のザックなので、税関ではほとんど調べられることなくパス。ロビーに出て、出迎えの周文さん探すが、らしき人は見当たらない。全員一ヶ所にまとまり、3人で手分けしてロビー内を探し回る。そのうち日本語を話せる案内係りの男性がやってきて、どこの旅行社か尋ねられる。場内アナウンスをしてくれるようだ。私は今こそ、この数ヶ月間勉強してきた「中国語」の成果を発揮すべく、記念すべき第一声で、「ティエンイー・リユーシェンシャー・タ・ヂョウウエンシェンション」(天一旅行社的周文先生)と伝えると、案内係りの男性は目を丸くしてうなずき、カウンターに向かった。間もなく女性の声で場内放送が流れた。私が伝えたのとほとんど同じ発音にしばし感激。しかしそれでも周文先生は現れなかった。案内係りの人が気を使って、天一旅行社に直接電話をしてもらおうと、かなり前に空港に向かっているとのこと。渡辺、高橋両名が「峠の会」の会旗をひるがえして、ロビー内を歩き回り始めた。

そうこうしている内に、12時15分、ようやく周文さんに会うことが出来た。どうもアルパイン社との連絡に行き違いがあったようだ。チャーターバスの到着も少し遅れるとのことで、とりあえず外で待つことになった。空港ロビーの外に出ると、そこは明らかに日本とは違う“南国”の気候であった。ジワーツと蒸し暑さが迫ってくる。暑さだけで皆がもうバテぎみになった頃、バスがやってくる。「デカイ！」大型のしかも2階建てだ。荷物は1階の座席に押し込め、子供も大人もワクワク顔で車中の人となる。<13:16>

一路台北市内に向かう。周文さんの自己紹介や、明日からの日程の説明などを聞くうち、バスは市内に入ってゆく。漢字で書かれた看板がひしめく街中は活気であふれている。バイクがやたらと多い。

<15:10> 昼食

台湾で最初の食事である。まずは「台湾ビール」で一息。料理はやはり“中華”の味で、みんな納得しながら食べているが、「これは旨い！」と言うほどでもなく、けっしてまずくもない。とにかく台湾をかみしめながらもくもくと食べていた。

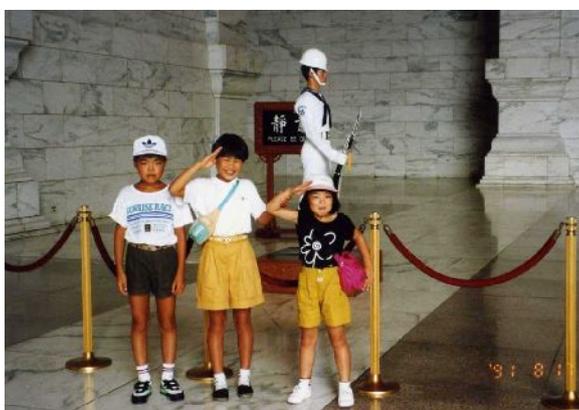
全員、台湾ドル(元)への両替がまだであったので、この食堂の2階にある両替所で、周

文さんをお願いして、まとめて当面必要な分を両替してもらう。(レートはホテルよりも少し良かった。)

今日予定していた中山協の表敬訪問は、今日が土曜日のため関係者が不在とのことで、省略することになった。そして周文さんの計らいで「中正紀念堂」の見学に出かけることとなった。

<16:20> 中正紀念堂

総大理石の巨大な建造物に、皆ため息。それに敷地の広さは、日本では考えられないくらい贅沢な使い方である。島国の台湾にも、大陸の民族の血が流れているのだなと感心してしまう。紀念堂内で子供達は、最初口ウ人形だと思った衛兵が、本物の人間だと分かり大喜びで、衛兵バックに記念写真に納まっていた。しばらく広い敷地を散策した後、バスに乗り込みホテルに向かう。



中正紀念堂 左から暁、千枝、萌

<17:10> ホテル着 (中国大飯店)

台北中央部の台北火車站 (鉄道駅) に程近い繁華街の中のホテルで、どちらかと言えばビジネスホテルといった感じである。部屋の設備も不具合なところが少しあり、みんな苦勞していたようだ。(私の部屋のフロは排水口が壊れており、お湯が溜まらず、ナイロン袋を排水口に詰めて、穂高と2人で這いつくばってお湯に浸かっていた。)

各自、3階から8階までのバラバラの部屋に分かれ、一息つく。

<18:50> 夕食

周文さんの案内で、バスにて夕食に向かう。広いレストランで、他の席より1mほど床が高くて、あたりが見渡せる特等席の円卓に座った。「ウカピー」という名で、決して悪酔いはしないという薬酒で乾杯する。実は台湾では「乾杯」というと、つがれた酒は一気に飲み干さなければ失礼になる。レモンの絞り汁が入っているのでいくらか飲み易いが、かなり強烈な味覚である。チビチビとしか飲めない人は「乾杯」の代わりに「隨意」と言えばグラスを持ち上げるだけでも良いと言う事である。次から次へと運ばれる料理に、すこしずつハシを付けるだけでも、最後のほうはもう食べ切れなくなってしまう。

食事後は、隣接しているお土産屋さんでみんないろいろ品定めしている。千枝や穂高は、友達のお土産を選ぶのに頭を悩ませていた。8時過ぎにホテルに戻る。

当初の予定では、翌日が「自忠」への出発日であったが、日本を出発する直前に日程の変更が知らされ、一日遅らさなければならぬことになった。というのは、台湾の到着日が土曜日のため、中山協も最近になって半ドンになり、午前中しか人がいない。したがって土曜日に入国した我々が、玉山への入山許可書を取得するには、パスポート現物が必要なたため、月曜日の朝まで待たなければいけなくなった次第である。

そんな訳で、明日（日曜日）は丸一日フリーとなり、帰国時が少し慌しくなるが、終日周文さんの案内で、“台北市内観光”をすることになった。そのため今夜は各自ゆっくりと台湾の第一夜をくつろぐことに。しかし夜な夜な、渡辺隊長、高橋、北村の“花のフリー3人組”でカラオケ屋さんに出かけたとか。 — 晩安 —

8月18日（日） 晴

我が家は少し早起きして、近くの「台北新公園」へ散歩に出かける。日曜日のせいか通勤ラッシュはないが、数台のバイクやスクーターがけたたましく走っている。公園内には朝の散歩を楽しむ人がチラホラ。野外ステージの上では、年配の人が“棒術”の練習をしている。若いカップルが早朝デートだろうか、私達の前を通り過ぎる。

<7:30> 朝食

台湾の朝食は一般におかゆが多いようで、あっさりしていて、昨日からの少しこってりした味に疲れ気味になっていたところなので、とても嬉しかった。

<8:20> ホテル発

「忠烈祠」

さまざまな戦争のために生命を落とした33万人あまりの将兵の霊が祀られている。ここで行われる衛兵の交代は有名で、我々も朝一番の交代の時間に合わせて出かけた。一糸乱れぬ揃いぶりは見事であった。

「故宮博物院」

当初からこの見学を日程に入れてほしいとお願いしていた。ルーブル、メトロポリタン、エルミタージュと並んで、世界4大美術館の一つに数えられている。中国歴代の皇帝が集めた青銅器、陶器、書画、彫刻などの超一流品が保管、展示されている。まさに「ラスト・エンペラー」の世界である。宝石類の展示の前では、女性方はため息の連続であった。

「圓山大飯店」

各国のVIPも利用する世界でも屈指のホテル。もちろん我々は建物をバックに記念写真を撮ったり、ロビーに入って見学しただけであるが。中国の宮殿さながらの贅を極めた大型ホテルである。



圓山大飯店

「龍山寺」

台北市内最古の歴史を持つ寺廟。彫刻や極彩色の装飾がとても寺とは思えないほどの豪華な造り。どうやって生活しているのかよくわからないおじさん達が、建物の隅や通路にゴロ寝している。境内にはいつも線香の煙が立ちこめている。

登山のツアーとは思えないような観光三昧の後は、買い物ツアーである。

まずは周文さんお薦めの「お茶」の間屋さんに行き、本場「凍頂烏龍茶」を買う。結構良質で、値段もかなり割安。会の仲間のお土産もここで仕入れた。

次に、周文さんの友人で、中山協の女性会員の方が経営しているお土産屋さんに出かけた。アンナプルナ遠征隊にされたこともある50歳代くらいの美しい方で、娘さん達も店を手伝っている。ここでも随分おまけしてもらった。

この後、食料品スーパーに行ってもらい、食糧担当者のみ明日からの現地調達分の食糧を買出しする。渡辺隊長も“台湾のスーパー”を一度見ておきたいと、買出しに同行する。お昼は「点心飲茶」でシューマイと餃子のオンパレードだったが、夕食は、台湾風海鮮料理で有名な「海霸王」にて文字通り魚介類を思う存分味わった。周文さんによれば、横浜の中華料理店でこのくらいの内容の料理を注文すると、1人1万円は下らないとのこと。それを聞いてなんだかトクした気分になってしまい、あまりハシの進まない子供達に「しっかり食べろー！」と叫んでしまう。

とにもかくにも今日一日は、「玉山登山隊」はどこかへ吹っ飛んでしまい。「峠の台北観光とグルメツアー」に明け暮れてしまった。このままここに居座りたいと思った会員がいたかは定かでない。

ホテルに戻り、登山ガイドをお願いする“謝”さんと面会。全員の旅券を渡し、入山許可申請の手続きをお願いするとともに、EPIカートリッジの購入もお願いした。この後、渡辺隊長の部屋に集まり、共同食糧の分担をする。そして各自部屋に戻りパッキング。いよいよ玉山が始まる。

自忠へ

8月19日（月） 晴

<8:30> 朝食

千枝はおかゆ食が気に入ったようだ。親2人と穂高は久々の洋食にホッと一息。コーヒーがうまい。

謝さんともう1人のガイド“林”さんがホテルに到着。林さんを紹介していただく。20代後半できゃしゃな体つきのとても気さくな青年で、子供達もすぐになついていた。謝さんは50代くらいの温厚な人柄で、かなりの経験の持ち主らしい。「半田ファミリー」の玉山報告書の中で確か“謝”の名字があったような気がして、尋ねてみるとやはり本人のようであった。子連れパーティーをガイドした経験がある方が我々のガイドリーダーであることは心強い限りである。

<9:30> ホテル 発

台北市内をあとに高速道路に入る。しばらく渋滞気味だったがしだいに流れてくる。周文さんは嘉義まで同行してくれる予定で、車中では謝さん林さんのプロフィール、台湾のあれこれ、玉山登山の心構え、あるいは車窓の景色のガイドやらいろいろ話をしてくれた。子供達（特に低学年）は最前列を陣取ってワイワイ騒ぎまくっている。時おり周文さんにも注意されたりしているが一向に効き目がない。大人達は周文さんや謝さんの話に耳を傾けながら、窓の外の景色を楽しんでいる。

途中サービスエリアにてトイレ休憩。売店で穂高の缶ジュースと私の缶コーヒーを買う。女性の店員さんに目の前の缶ジュースを指差し「這個一個和珈琲一個」と言うと、両方一本ずつ出してくれた。「一共多少錢？」と聞くと丁寧に指で示しながら「スーシーウー（四十五元）」答えてくれた。結構通じるもんだ。

<12:30> 嘉義 着（嘉南大飯店）

下山後に宿泊する予定のホテルで、嘉義では最高級とされているなかなか立派なホテルである。ここで昼食をとる。中華料理の連続で食べるのが少し苦痛になってきた萌ちゃんが、ベソをかいて周文さんに慰められている。周文さんのおごりでビールも少し入り、ホロ酔い気分でホテルを出る。

<14:10> 嘉義 発

途中、町外れの食料品店で果物を仕入れる。「レイシ」によく似た「龍眼」、お釈迦様の頭に似ている文字通り「釈迦頭」、星のような形の「楊桃」（スターフルーツ）等等、色々並んでいて、店のおばさんが気前よく味見をさせてくれる。どの果物も甘味が強く（アケビのような甘さ）、一通り食べてみたが、やっぱりバナナが一番おいしかった。

ここからしばらく走ると、やがて山らしい景色が窓の外に見えてくる。見た目には日本の山とさほど変わらない濃い緑の森林帯であるが、よくよく見るとバナナやココヤシの木がいたるところに生えていて、しみじみ亜熱帯を感じる。

バスは徐々に高度を上げ、「阿里山」付近を通過する。お茶畑が延々と続いている。そこか

らさらに奥へと進み、みんな少しカーブの山道にウンザリし始めた頃、「自忠」の民宿に到着。(標高 2,300m) <16:29>

暁が少しバスに酔って苦しそうである。外に出ると空気がひんやりして気持ちがいい。民宿の前にいた青年に「ニィハオ！」と声をかけると「ニィハオ！」と答えてくれる。民宿の玄関に入るとすぐに土間になっていて、その部屋の壁一面に玉山登頂記念のペナントが貼られている。その中に一際目立つ玉山の大きな写真パネルが飾ってある。これは周文さんが撮影されたもので、もし玉山登頂に成功した折には、全員にこの写真をプレゼントしてくれると周文さんが約束してくれた。周文さんは山岳写真家としてもかなりの著名人らしい。

<17:30> 夕食

わりと日本食に近い食事で、アンかけ豆腐がおいしかった。食事をしながら謝さんの話に耳を傾ける。そのうち謝さんが台湾の過去の歴史について話し始めた。ゆっくりとした口調でかみしめる様に、過去の台湾人と中国人(大陸)との弾圧と抵抗の歴史的事実、いわゆる「2. 28事件」をめぐるさまざまな体験談が、ついこの間の事のように語られ始めたのである。直接当事者から聞く言葉にはとても重みがあった。しかし詳しくその知識を持たない私達は、ただうなずきながらその言葉に聞き入るだけであった。

食事後は各自パッキングを行う。登山に不必要なものは民宿で預かってくれるので有難い。

民宿には小学生くらいの女の子がいて、ひょっとしてこの子がシャオリン(小鈴)かなと思って、小倉母が「シャオリン？」と本人に問いかけたが、ササッと部屋の奥に引っ込んでしまった。これもやはり「半田ファミリー」の報告書の中で、自忠の民宿の“働き者の少女”として登場した子の名が「シャオリン」だったので、彼女がその当人かなと思った訳だがどうも違うようだ。でもあとで謝さんに聞いたら、やっぱり彼女が期待通りの「シャオリン」であった。とても恥ずかしがり屋で、初対面の人とはめったに話さないらしい。

今、小学5年生くらいだそうで、みんなから日本の硬貨をたくさんプレゼントされて、そのときのあどけない笑顔がとても可愛かった。

明日は4時起床のため、早々に2階の部屋でザコ寝となる。民宿と言っても実際のところ“山小屋”と言った感じである。

<20:30> 就寝

排雲山荘へ

8月20日(火) 晴

<4:00> 起床

<4:30> 朝食

みんなウツロな眼をして食事をしているが、あまり食が進まないようだ。

<5:10> 自忠 発

走るのが不思議なくらいのオンボロバス（失礼）に乗り込む。民宿の主人の運転だが、曲がりくねった山岳道路をけたたましく音をたてて突き進んでゆく。しばらく走ると東埔山荘を通過して、その先にある検問所のある広場にさしかかった。その広場をスピードを緩めながら、最初左へそして大きくハンドルを切って右へ迂回し始めた。トイレ休憩かなと思いつつしばらく様子を見ていたら、運転の主人が急に何か叫んだ。それを聞いた謝さんが「みんな座席の前の取手をしっかり握って！！」と叫ぶ。「何事じゃ！」と思ったが、私はとっさに今何が起ころうとしているか解ってしまった。バスの進行方向には今上がって来た道と直角に別の山岳道路が延びているが、クサリでしっかりゲートされており行き止まりになっている。その右隣に車一台分何とか通れるくらいの隙間があるのだが、人が歩いても攀じ登るくらいの傾斜がキツイ坂になっている。最初はまさかと思ったが、バスはこのスキマめがけていきなり突進して行った。一瞬体が宙に浮いたようだった。みんなあっけにとられ、めん玉だけがカッと開いて声も出なかった。バスはあっという間に爆音とともにその坂を乗り越えてしまったのだ。少しの間をおいてバスの中は大歓声に包まれた。台湾の「ビッグサンダーマウンテンやー。」子供達も大人達もみんな顔をクシャクシャにして喜んでいる。デリカ真っ青！大胆不敵なバスであった。

山岳道路をしばらく行くと少し下り坂となり、石畳の道が現れる。そして間もなく石垣で囲まれた終点の広場に着く。

<5:40> 塔々加鞍部 着 (2,700m)

各自身支度を終え、全員で一、二、三、の号令に合わせてラジオ体操をする。謝さんも林さんも見様見真似でやっている。早起きの苦手な穂高の体調がイマイチで、バス酔いも手伝ってグッタリしている。

<6:00> 塔々加鞍部 発

鞍部の広場から左手に登山道が延びている。右手に深い谷を見ながら緩やかな傾斜の道に行く。道幅はそんなに狭くなく歩きやすい。

やはり穂高の体調が思わしくなく、みんなのペースから遅れ始める。林さんが最後尾につき、先頭の謝さんとシーバーで連絡を取りながら、穂高のペース合わせて歩いてくれる。ときおり「ハイ！ ドーシタ？」と声をかけたり励ましたりしてくれるが、ペースはほとんど遅れるばかりであった。

一時間ほど歩いたところで3,000m地点に到着し休憩。ここで謝さんとも相談し、パーティーを、子供のペースの早いグループと遅いグループに分け、それに大人が均等に分かれて行動することにした。

<先行パーティー>

謝さん、渡辺、小倉父、千枝、高橋、北村、村瀬父、母、雄一、黒瀧恵、鮫島暁。

<後行パーティー>

林さん、小林、黒瀧父、母、直、真、小倉母、穂高、鮫島父、萌。

後行パーティーでは、やはり穂高が最後まで体調不良が続き、途中昼寝も入れたりして回復に努めたが、嘔吐を繰り返し、胃の中がすっかりカラっぽになって体力を消耗しきっていた。でも何とかみんなの手助けでパーティーから脱落することなく行動していたようだ。穂高以外では、黒瀧直が、3,000mを過ぎた頃から疲労が激しくなり、彼も最後まで苦しい行程のようであった。

先発隊はおおむね順調に行動できた。出発から4時間ほど歩いた頃、道の左手に一枚岩の大削壁が現れる。「モンロー断崖」だ。ここで昼食をとる。自忠の民宿で作ってもらったお弁当を広げる。白いご飯におかずが3品と漬物。いかにも質素な中身であるが、ここではほとんどみんなの意見が一致した。「今まで台湾で食べたものの中で一番おいしい！」なるほど、日本食に限りなく近く、サッパリ味が良かったのだろう。

食事が終わるとさっそく“虫”がうずき出して、みんな岩にへばり付き始める。謝さんが軽快なデモンストレーションを披露してくれる。それに刺激された高橋さんもかなり上部まで攀じ登っている。

この休憩までの先発隊各メンバーの体調はまあまあであったが、暁が少しバテ気味で、お弁当もあまりのどに通らなかった。荷物を半分以下に減らして歩かせることにする。

食後の運動も終わり出発にかかる。謝さんの後に小学4年生4人が続き、その後を大人6人が行く。歩きやすいゆったりしたペースで助かる。恵、千枝は最後までペースに遅れることなく快調に歩き通したが、雄一と暁はいつもより重い荷物とおしゃべりがたたって、ついつい遅れ気味になる。

道は相変わらず急登もなく、木橋が滑るのさえ気をつければ、東海自然歩道並みの歩きやすい道が続く。謝さんが子供達の気を紛らわす為に、時おり足元にころがっている小さな水晶を拾っては、子供たちにあげている。1時間ほど歩き、大きな曲がり角のところで小休止。その曲がり角の向こう側をのぞいてみると、ヤッター！「排雲山荘」が前方に見える。「晴天白日旗」がはためいているのも確認できる。みんなヤッタネ！という雰囲気があふれ、言葉も弾んでくる。しかしこの時点で、私も含めてかなりの部分で“高山病”とおぼしき症状が現れ始めたようだ。頭痛とまではいかないが、頭を鉢巻でギュッと締めたときのような重たい感じがするのである。高度計を見ると、3,300mを示している。富士山頂上を踏んでいない私にとっては、すでにこれまでの最高到達点に達していたのだ。

小休止後、なんとなく重くなってきた体をふるい起こし出発する。しばらく行くと急な石の階段が現れ、ここを登り切った所で「排雲山荘」の広場に出る。(3,400m)

<12:50> 先発隊、**排雲山荘** 着。

みんなホッと一息。とにかくここ迄やって来たという感じで、しばらく小屋の前のベンチに座って、辺りの景色を眺めながら心地よい風で汗を乾かす。

台湾の女性ガイドを伴って、欧米人のパーティーが玉山より下山してくる。数名の女性もいるが、みんなごっついデカイ！

30分程してから、謝さんを伴い、渡辺、小倉父、村瀬父、北村が後発隊の救出(?)

に向かう。息子のことが気掛かりだったが、シーバーの交信によると、我々より1時間30分遅れ地点まで全員到達しているらしい。カラ身で30分くらい飛ばしたところで後発隊と合流。穂高、直がかなりしんどそうだが、後は全員元気そう。穂高は、母と林さんと一緒にしんがり歩いてきたようで、すでに腹の中のを全て出しつくし、ほとんど気力のみでここ迄歩いてきたようだ。ここ迄来る途中、今回の登山が海外ということもあって、これまでの山行とは違った大きな意味を持っていることが多少なりとも理解していたかどうかは分からないが、いつもはすぐに弱音を吐いてしまう穂高が、ここ迄泣き言ひとつ言わずにやってきたらしい。

かなり限界に近い顔つきなので、「おんぶするか？」という、悲しそうな顔をしながら「ウン」と弱々しくうなずいた。背負ってしばらく歩くうち、背中から寝息の音が聞こえてきた。このとき私は正直、穂高の玉山登頂は無理かもしれないという思いが頭をかすめた。排雲山荘の手前の階段にさしかかるところ、眠りから覚めたようなので、「小屋まで歩くか？」という、コックリした。背中からおろし手を引いて歩いた。千枝が山荘の広場からビデオを回している。先発隊の拍手と励ましの中、全員なんとか本日の目的地にたどり着くことが出来た。辛苦了!



酸素補給する穂高

<14:41> 後発隊 排雲山荘 着

夕食準備までの間はフリータイムで、各自思い思いにくつろぐ。疲れと高度障害のため、程度の差はあるが軽い頭痛などがほぼ全員に現れたようだ。子供たちの中では千枝と萌ちゃんの少女組みが元気だったが、夕方萌ちゃん嘔吐する。

外は結構涼しく、小屋の布団にくるまって寝るものもいる。部屋の中は真ん中に土間があり電灯はなく、つきあたりには華やかな中国風の仏壇が設置されている。土間の両側が2段の板張りの寝台になっている。

身の回りの整理を済ませて外に出ると、欧米人らしい男性がベンチに座ってはがきを書いている。綺麗な絵葉書だったのでそばでそれを覗き込みながら、危なっかしい英語で色々話しかけてみた。その男性はスイス人で、休暇を利用して台湾に来ているようだ。国では小学校の先生をしているらしい。つい先ほど萌ちゃんが山荘前で嘔吐したときに、土の上の汚物に水を持ってきて一生懸命洗い流してくれたのが彼だった。小学校の先生と聞いて

納得した。

渡辺隊長に呼ばれ小屋に戻ると、謝さんがこの山荘の管理人の“張”さんを紹介してくれる。思い切って中国語であいさつしてみた。「我姓小倉（シャウワン）、請多関照」と言うと、張さんは「ナンタラ、カンタラ」と口早にニコニコしながら話しかけてくれたが、残念ながら私のヒヤリング力では全く理解できなかった。

4時頃から夕食の準備にかかる。万貴ちゃん(小林)は頭痛でしんどそうだったが、食料担当の責任もあってセッセと動き出す。小倉母、村瀬母、黒瀧母に男性数名も加わり、手際よく分担してとりかかる。21人分の食事を作るのは結構大変で、5台のEPIをフル稼働しなければならない。

土間のある部屋のほうから、何やらお経のようなものが流れてくる。毎日の恒例の行事らしく、ラジカセが発生源のようである。ボリュームがめいっぱい回してあるので、山荘中に響きわたっている。よく聞けば、日本のお経と違ってなんとなくメロディックで、暗さは感じがないが何せ音が大きく、体調不良で横になっているものにとってはさすがに苦痛であった。おまけに仏壇では線香がたかれ、煙が部屋に充満して何やらすさまじい状態になっている。この国の人々の信仰心は、日本のそれとは比べものにならないことはある程度理解していたので、多少のことは我慢しなければいけないと思ったのだが。しかし翌日は、張さんのほうで気を使っていたいて、部屋の窓を少し開けて換気を良くしたり、線香をたく時間を短くしてくれた。それでもお経だけは延々30分近く続くのであった。



排雲山荘前で 穂高と萌

<17:00> 夕食

ちらし寿司は、ご飯がやわらかすぎてイマイチだが、それが幸いして、おかゆが割りとおいしく、おなかの中に入っていく。しかし、高度障害の影響か、全員食が思うように進まない。謝さん、林さんは黙って食べてくれているが、果たして口に合っているのか心配である。

夕食後、謝さん林さんと、下から持ち上げた「ウカピー」を一杯やる。林さんは、酒はほとんど飲まず、ひたすら自分でお茶を沸かしては飲んでいる。(林さんのパワーの源はお茶である。)

夜になっても、子供たちの体調はあまりすぐれない。直は相変わらず疲労と高山病が重なって苦しそうである。夕食前に、この山荘に宿泊している台湾の医学生からもらった「精

神安定剤」らしき薬を飲んだ後は、いくらか口にもものが入るようになった。雄一、暁、穂高、真もまだ軽い頭痛か嘔吐などがある。恵、千枝、萌は比較的元気だが、活発な動きが出来ずおとなしくしている。

大人たちはせいぜい軽い頭痛程度だったが、なかなか深い眠りにつけなかったようだ。

<20:45> 就寝

頂上へ

8月21日(水) 晴

<5:00> 起床

いよいよ登頂の日だ。しかし直の体調は依然回復の兆候がなく、雄一、穂高、真もあまりすぐれない。最終的に、黒瀧直、真、そしてその父信夫の残留を決定し、謝さん、林さんを含め18名にて玉山登頂に向かうことにする。穂高はまだ疲れの取れ切っていないウツロな目をしながらも、「行く！」と意思表示をしたので、ともかく行けるところまで行って、無理と判断したら2人で下山する覚悟で、連れて行くことに決めた。

<6:17> 出発

謝さんを先頭に、子供たちがその後につく。道はしばらく樹林帯の中を、少しずつ高度を稼ぎながら行く。謝さんは実にゆったりしたペースで、子供達もさほど苦しい様子もなくしっかりした足取りで歩く。今向かおうとしている山が、これまで経験したことのない未知の高度有する場所であることを敏感に感じ取っているのか、誰もがグチひとつ言わず黙々と歩いている。

40分ほど歩いたところで、やや視界が開けた分岐点の道標がある場所に着く。「南峰」への分岐である。ここで小休止とする。ビデオを回すが、みんなの顔はまだボーとした感じである。若い北村氏はまだまだ余裕タップリで、タバコをうまそうに吸っている。千枝と萌ちゃんはピースサインでカメラに応える。穂高もようやく口数が増えてきた。見通し明るいかもしれない。雄一、暁、恵も調子はまあまあ。最長老高橋さんも、コースタイムを記録したりカメラのシャッターを切ったり、元気いっぱい動き回っている。

15分後に出発。しばらく登り詰めて行くと、しだいに樹林の高さが低くなり、そのうち道はガレ場状になってくる。森林限界に出たようだ。高度計は3,600mを示していた。

ガレ場と言っても、そんなに不安定な浮石はなく、しっかり整備されている。つづら折れの道を何度か折り返して行くうち、しだいに傾斜もきつくなり浮石もチラホラ現れてくる。しかし慎重に歩けば、さほど不安なところはない。足元の岩の間に、何と言う名かは分からないが、ウスユキソウに似た小さな花が見え隠れする。前方を行く子供達の足取りを時折見やりつつ、心の中で「マダカ、マダカ」と繰り返しながら、ひたすら重い足を持ち上げる。

先頭の謝さんが立ち止まり、その場所まで登ってゆくと、そこはすでに稜線に達していた。山頂まであと400mの地点だ。ルートの右手にはまだ陰しそうな道が続いている。

手を使って大きな岩棚を乗り越して行くと、左側がスッパリ切れてヤバそうな道が現れるが、金網でしっかりフェンスされており、不安を感じることなく通過する。この箇所を過ぎた頃から道はいよいよ急登となり、歩くペースはさらに落ちてくる。ここらで一休みしたいなと思った頃、「北峰」への分岐点に到着する。当然のことだが北側に「北峰」が姿を現す。頂上にあと200mと迫る。ここで一本とる。子供達は頂上が間近ということもあって活気づいている。穂高は、昨日や今朝のことを思えば、まったく別人のようにスッカリ回復し切って、いつもの「ホッちゃん」に戻り口数も動きも復活したようだ。

しかしさすがに誰もが、未経験の高度の中での体が、気持ちとは別に思うように動いてくれないようである。



北峰への分岐点

謝さんのかけ声で出発にかかる。今度ザックを降ろすのは玉山山頂である。最後の詰めはやはりこれまでよりもキツク感じる。でも、一步一步が頂上に近づいていると言う実感がジワリジワリと湧いてくる。ふと前を見ると、謝さんの後ろに、千枝が、雄一が、暁が、恵が、そして穂高が、いったいあの小さな頭の中でどんなことを考えながら歩いているのだろうか、わき目も振らずにしっかりした足取りで歩いて行く姿が実にたくましく見える。今日ここにはいないファミリー一部の仲間、ナミちゃん、ヒロミちゃん、アズサちゃん、カン君、ケンゴ君、タケシ君、ワタル君。いつも一緒に山を歩いてきた仲間たちの大声援がアイツらの背中を押し上げている。ふとそんな気がした。子供達を見ていると、登頂前から私の胸の中はもういっぱいになりかけていた。

謝さんがふと立ち止まり振り向いて言った。「頂上だよ。」

... しばらく言葉が出てこなかった。

それから謝さんは実は頂上より2mほど低い位置にいて、そこから子供達を手招きする。私達を先に頂上に踏ませるためにそこにとどまっている。

そして、千枝、雄一、暁、恵、穂高、それに続き次々とみんなが頂上に足を踏み入れる。萌ちゃんも少し遅れてお父さんと一緒に「登頂！」

<8:27> 玉山頂上 3,952m

少しの沈黙の後、「ウワーッ」と低い歓声が沸き起こった。みんなその場に立ち尽くす。360度さえぎるものが何一つない雄大な展望が目の前に広がる。そして喜びがヒシヒシと湧いてきたようで、山頂は騒然となってくる。

親達は子供達のガンバリの健闘をたたえ、めいっぱい褒めている。渡辺隊長が、みんなの労をねぎらいながら握手して回る。そしてみんな、ここまでガイドして頂いた謝さん、林さんに感謝をこめてかわるがわる強い握手を交わす。謝さんがおもむろにみんなの真ん中に入り、「春日井峠の会 玉山登頂 バンザーイ！」としっかりした日本語で声を発する。みんなもそれに続く。しばらくは興奮のるつぼである。



玉山頂上

そんな様子を見ていて、頂上を踏む直前から「グッ！」と来そうになっていた私は、感情を抑えるのに必死だった。しかし謝さんが私のそばに歩み寄り、握手を求めてきたときには、我慢の限界に達してしまっ、不覚にも涙腺が一気に緩んでしまった。謝さんは私の肩をしっかりと抱いてうなずいた。私は聞き取れないくらいの情けない声で「謝々、謝々」を繰り返していた。

ふと私はこんなボロボロの顔を子供達に見られるのはマズイ！と、とっさに思い、素早くビデオカメラを取り出して、周りの景色を撮り始めた。しかし、レンズから見える景色はスリガラスのように霞んでいた。

頂上での興奮状態が一段落ち着いた後は、みんなおやつを食べたりカメラのシャッターを切ったり思い思いに3,952mのひとときを過ごす。

黒瀧母は、生まれて初めて山のピークらしいピークを踏んだそうで、すっかり感激しきっている。万貴ちゃんは「も一歩きと一ない」といってへたり込んでいる。村瀬母はまだまだ元気いっぱい。小倉母はずーっと感激にひたりっぱなし。子供達は景色よりもおやつを食べるのに忙しそうだ。

今日の予定としては、天候と各自の体調を判断して、北峰を目指すパーティーを編成し、登頂に向かうことになっている。話し合いの結果、謝さんにガイドをお願いし、渡辺、村瀬父、母、高橋、北村の6名で向かうことになった。私は体調も良く行ってみたい気もあったが、下山する子供達をサポートする大人の頭数が少ないのと、何よりも、干枝や穂高

と最後まで行動を共にしたいという気持ちが強くあったので、北峰は不参加とした。



頂上からの遠望

<9:20> 下山開始

分岐より「北峰隊」と別れたあと、登りの時よりもさらに慎重に下ってゆく。

<< 以下「北峰隊」の行動タイム >>

<11:03> 北峰登頂

<11:33> 下山開始

<13:12> 分岐

<13:32> 林さん、黒瀧父と合流 ※

※ 実は、私達（子連れ下山隊）が山荘に到着した後、時間的にも余裕があったため、林さんが黒瀧父を伴って再び玉山登頂のガイドを引き受けてくれたのである。本来に今回のガイドの方の心遣いや行動には頭が下がる思いであった。

<< 子連れ下山隊 >>

林さんを先頭に子供達が、登頂し終えた安堵感もあって、ワイワイはしゃぎながら下って行く。林さんがシーバーで無線仲間の女性と交信し、「小学生6名を含む大パーティーをガイドし、玉山登頂に成功した」ことを伝えている。相手の女性も祝福のメッセージを送ってくれる。林さんがシーバーのマイクを萌ちゃんに近づけ「コンニチワ」を言うように催促すると、萌ちゃんはそれに応えてシーバーに向かい、あらん限りの大声で「コンニチワァー」と叫んでいる。なにかにつけて笑い声が山々に響きわたってしまう、楽しくてうれしい下山であった。

<10:30> 排雲山荘 着

ドッと疲れが出てきてしまった。上では調子良かったのにまた頭が重くなってきて、私はフトンにもぐり込んでしまった。女性達は意外に元気そうで、ホットケーキ作りを始めている。このホットケーキが予想以上に好評を博し、林さんもホントウにおいしそうに食べていた。前にも述べたが、腹ごしらえを終え少し休息をとった林さんは、黒瀧父と共に再び玉山に向けて出発した。

2人は1時前に玉山登頂を果たし、下山途中北峰の登頂を無事終えた6名と合流。伴って下山してくる。

<14:31> 北峰隊、主峰2次隊 排雲山荘 着

調理場の裏から、下山してきた8名を拍手で迎える。ビデオカメラからのぞくと、どの顔も疲れてはいるが、満足感にあふれている。村瀬母が紅一点で本当によく頑張った。さっそくみんなホットケーキとコーヒーで一息入れる。

山荘の玄関の広間で、林さんが臨時の記念品販売員となって、ペナントやバッジを売り始めた。会でペナントを購入し、それに全員で寄せ書きをする。



林さん

<17:00> 夕食

ジフィーズをおいしく作るにはなかなかの技術を要する。水を放り込み鍋で炊き込んでハイ出来上がり！ ではジフィーズに申し訳が立たなくなることが解った。

夕食後、今日も謝さん、林さんを交え一杯やる。子供達は疲れたのか、みんな布団に入っている。目的を達した安堵感で、どの顔もほころんでいる。あの酒にうるさい鮫島父は、どうもこちらの酒が合わないのか、珍しく控えめである。若い北村氏、渡辺隊長、村瀬父高橋さんはグイグイやっている。黒瀧父や女性陣はコーヒーをすすり、私と林さんはお茶をチビチビやっていた。(ビールが恋しい！)

寝る前に、黒瀧氏と林さんの寝床にもぐりこんで、林さんが持っていた中国語訳で少し古い日山協編集の登山技術書を見せてもらった。それを見ながら山のあれこれを話し込んだ。(ほとんど筆談だが) 林さんは1993年にチョモランマ遠征に参加する予定で、そのために必要なお金を一生懸命貯めているとのことである。少年のような目で山を生き生きと語っている林さんがまぶしく感じた。

(この林さんとは、年賀状などでズーと交流が続いていて、十数年後の2003年、小倉家を訪れている。)

<20:00> 就寝

下山

8月22日(木) 晴

<4:30> 起床

<5:15> 朝食

<6:30> 排雲山荘 発



排雲山荘前で 小倉家と謝さん、林さん

少し軽くなったザックのせいもあって、みんなの足取りも軽快である。直もようやく回復の兆候を見せてきた。途中大削壁で、恒例のごとくへばりついて遊ぶ。余裕タップリのようだが、実は今日の予定としては、遅くとも12時前までに塔塔加鞍部着にかなければならない。というのは、例のビッグサンダーマウンテンバスが鞍部にやってくるには、検問所に詰めている警備隊員がお昼休みにいなくなるのを利用して、あのゲート横を突破してくるためである。バスが到着する時間に間に合わないと今日中に山から下れなくなる。しかし今日みんなの調子からすれば心配なさそうである。3,000m地点を通過する頃には、高度による影響はみんなほとんど消え失せていた。

鞍部まであと数百mの地点で一本とる。かなりいいペースで来たので時間も余裕があり、日陰があるこの場所でしばらく時間調整することにする。渡辺隊長と高橋さんが、ガラにもなく山の植物や花を観賞して、あれこれ2人で語り合っている。(少し気持ちが悪い)

<11:30> 塔塔鞍部 着

みんなザックを降ろし、しばし「終わったー」という安堵感に浸る。今来た道を振り返り、この3日間の思い出にふけてでもいるかのように、誰もが穏やかな表情になっている。ところが子供達はというと、何やら草をとってきて、それを石でつぶして訳の解らない遊びを始めている。鞍部までハイキングに来ていた台湾の家族が、不思議そうにそれを眺めていた。男どもは退屈しのぎに、林さんと片腕立て伏せの腕試しを始めた。村瀬母が謝さんから台湾の教育事情やいろんなことを、メモを取りながら熱心に聞いている。(雄一、台湾留学???) 他の女性方は、ドカッと腰を下ろしたその場を一步も動くことなく、オヤツとオシャベリにいそしんでいる。そうこうしているうちに12時が過ぎてしまったが、バスが来る気配が全くなく、とうとう12時半になってしまった。そして道の向こうからやって来たのは、警備隊員の少しコワそうなお兄さんであった。謝さんとなにか話し始めたが、何やら激しい口調でまくし立てているようにも聞こえた。何事だろうと謝さんから事情を聞いてみたところ、運悪く今日この近辺を台湾のお偉いさんが視察に訪れたようで、そのため昼休み時間も検問所を留守にする訳にはいかず、例のゲート突破がままたらなくなったビッグサンダーが検問所の前で足止めをくっているとのことだ。それにしてもこの怖そうなお兄さん、よくここ迄歩いて知らせに来てくれたものだ。

<12:35> 塔塔鞍部 発

まあこんなハプニングも、日本に帰ればいい思い出になるだろうと景気よく歩き出したが、最初から登り坂が始まり、相当先が長そうな雰囲気です少し青ざめる。

途中休憩をとった場所にはかなり大きなクスノキがあったので、「トトロの木だよ」というと、みんな体をそっくり返してクスノキを見上げ、トトロやネコバスを探していた。

<13:30> 上東埔（検問所） 着

バスの中で民宿の主人がにこやかに出迎えてくれる。トイレなどを済ませすぐにバスに乗り込む。

<13:55> 自忠（民宿） 着

昼食をとる。久々のホカホカごはんがウマイ！

我々が入山している間、嘉義で待機していた洪さんの運転する2階建てのバスがすでに到着しており、ノンビリする間もなく、デポの荷物を積み込み、我々もバスに乗り込む。

<14:43> 自忠 発

作業員らしいおばさん達を乗せた車が、我々のバスと前後して走っていて、その車の造りがおもしろいので、みんな身を乗り出して眺めている。大型トラックのかなり高い荷台に座席が並んで据え付けられており、囲いも屋根もないので、20人位のおばさん達がきちっと並んで座っているのが丸見えである。急ブレーキなど踏んだら結構ヤバそうだ。

山間部を抜け、町並みが見えてきた頃、トイレ休憩をとる。こちらでは“名所”とされている長い吊橋が近くにあり、バスが橋を渡りきったところで待機してくれるそうなので、みんなでゾロゾロ渡り始める。川の水は濁っていて、ヤマメやイワナが住むのはちょっと無理な感じだ。

<17:20> 嘉義（嘉南大飯店） 着

周文さんが玄関の前で出迎えてくれ、力いっぱいみんなに握手してくれる。「素晴らしい、よくやった、予想以上の成果だ！」と心から喜んでくれた。子供達もいっぱい褒められた。

ところで、謝さん、林さんは明日からさっそく本業の仕事が待っているそうで、今日中に台北に戻らなければならないという。そこで周文さんが2人とも参加して登頂祝賀パーティーを行うことを提案し、席を設けてくれることになった。

時間もあまりないので、ホテルのチェックインを手早に済ませ、着替えをして会場の料理店に向かう。本日の“菜”は四川料理とのことである。

<18:20> 夕食（祝賀会）

とにかくまずは“乾杯”である。「随意」なんて言ってもらえない。冷たいビールを一気に飲み干す。みんな喜びもひとしおといった感じで、話も弾み料理もどんどんオナカに入っていく。そして代わる代わる周文さんや謝さんにビールを注ぐ（林さんはお茶）。周文さんは一人1人に声をかけながら労をねぎらっている。

かなりお酒も入り、宴会も盛り上がってきた頃、周文さんが子供達に思いがけないプレゼントを準備してくれた。1人1人になんと“腕時計”が渡されたのである。子供用とい

っても、自分の時計なんて持ったことのない子供達にとってはもう喜びの絶頂で、玉山登頂のときよりも興奮のるつぼと化した。そして大人達には、自忠の民宿にも飾ってあった、周文さん自身が撮影した玉山の写真がプレゼントされた。又、謝さんからは私達に「中山協」のペナントとバッジの贈呈があった。

時間もあっという間に過ぎ、最後に渡辺隊長がお礼の言葉を述べて、祝賀会のお開きとなった。

店を出ると外はもうすっかり暗くなっている。謝さんと林さんは、我々のホテルと反対の方角の駅に向かおうとしていた。ここでもみんな代わる代わるかたい握手を交わして別れを惜しんだ。そして人ごみの中に2人の姿が見えなくなるまで見送っていた。

一路平安、再見！

ホテル前にて周文さんと別れて、各自自由行動とする。北村氏はサウナへ直行。渡辺、高橋両氏は夜のちまたへ（?）。子連れグループと小林は近くのデパートの見学に向かった。台湾では共働きの夫婦が主流のため、ほとんどのデパートは仕事が終わった後もゆっくり利用できるように、夜の10時頃まで営業しているとのことだ。

特に何をかうという訳でもなかったが、あちこちを見て回った。黒瀧家は酔い止めの薬を探し回っている。子供達はやはりオモチャ売り場の前でしばらく動かない。

突然穂高が「シッコ！」と叫んだ。こりゃヤバイと思った私は辺りを見回したが、かなり広いフロアなので、トイレのある場所はサッパリ見当がつかない。少し発音に自信が無かったが、売店の店員さんに「請問、廁所在哪儿？」と尋ねると、指を差してその方向を教えてくれた。私は「謝々」といって頭を下げ、スッ飛んでトイレに駆け込んだ。

このあと展望エレベーターに乗って夜の街を眺め、その街のメインストリートの見物に出かけた。車やバイクも多くかなりの賑わいである。道の脇には食べ物屋の屋台が軒を連ねている。何のどの部分かよく判らない肉のかたまりがズラーとぶら下がっていて、なんともいえない匂いが鼻につく。「ウカピー」のような酒が売っていないかと酒屋さんを探し回るが、どこにも見当たらず、少し細くて静かな路地をしばらく歩いていると、うまい具合に見つかった。薄暗い店で、棚に並べられている酒はちょっとホコリがかぶっている。店には4人ほど人がいて熱心にテレビを見ているので、我々が入っていても気づいていないようだ。年配のおじさんに「我要這個！」と声をかけると、こちらを振り向いたおじさんは「私、日本語分かります。」と流ちょうに話しかけてきた。そしてそれから色々雑談しながら、お土産用にしこたま酒を買い込んだ。50代以上の人はたいてい日本語が話せるとは聞いていたが、軍国日本の名残だと思つくと、なにか複雑な思いがした。

ホテルに戻り、会のお土産（烏龍茶）の分担を渡辺隊長の部屋で行なったあと、各自の部屋で帰国の準備をする。久々にフカフカ布団のベッドにもぐり目を閉じると、あっという間に過ぎた6日間の出来事が頭の中を駆け巡った。

帰国

8月23日（金） 晴

<7:30> 朝食

<8:00> ホテル 発

いよいよ帰国の日となってしまった。周文さんとともにバスに乗り込む。バスは高速道路に入り快調に飛ばしてゆく。途中、大型トラック同士の接触事故を目撃してしまう。

飛行機の出発時間が夕方の4時で、かなり時間に余裕があるということで、周文さんが子供達のために素晴らしい計画を準備してくれた。私はその存在を、ガイドブックを見て知ってはいたが、「小人國」に連れて行ってってくれるらしい。子供達はそれがなにかよく分からないようで「ヘー」といった顔をしていた。私は態度には示さなかったが心の中で「ウレピー！」を連発していた。

<11:15> 小人國 着

「小人國（シャオレンクォー）」とは字の通り「小人の国」の意味で、ミニチュアワールドの公園である。世界の有名な建造物を始め、台湾、中国（大陸）の古代および現代の建造、建築物が実物の25万分の1の大きさに造られ展示されている野外施設で、約10haの広さを有し、すべて見て回るには半日はかかりそうだ。スフィンクス、日本の大阪城に始まり、中正国際機場、中正紀念堂、大陸の紫禁城、それに万里の長城まで登場する。実に精巧に造られてあるため、カメラに収めると、人の姿が写っていなければ本物と区別がつかない。子供達が喜んだのは、滑走路を実際に動く飛行機や、高速道路を走る車である。港では船も水中のレールに乗って水上を航行している。大人達も童心に戻って「すごい」と感嘆の声を上げている。周文さんがカメラアングルのいい場所を通るたびに、そこをバックにみんなの写真を撮りまくっている。

一時間ほどでほとんど見て回り、食堂でお昼ご飯にする。お天気もよく汗ばむくらいで、ビールがうまい。“ハイネケン”が出てきたので、鮫島父の顔が輝いた。そろそろ時間も迫り「小人國」を後にする。



小人國にて

<12:45> 小人國 発

途中、お土産屋さんに一軒寄った後、飛行場に直行する。

<14:00> 中正國際機場 着

荷物のチェックを受ける。ザックの片隅に詰め込んできた玉山頂上の“石”が、X線カメラで発見されて取り上げられないか、心配そうに子供達がモニターを覗き込んでいる。数名の荷物が引っ掛かりかけたが、何とか無事に通過。出国手続きに向かう。

ここで周文さんともお別れである。周文さんは全員が手続きを終えるのを見守るようにカウンター越しに立っている。そして待合室に向かう通路の曲がり角で、みんな振り返りながら何度も手を振る。周文さんもそれにうなずいて応える。

さようなら、周文さん。再見！

表示衷心地感謝！

工作順利、身体健康！

免税店にて、お酒などを品定めした後待合室へ。

<15:30> 搭乗

<16:05> 台北 発 (日本アジア航空284便)

無事に日本の本土に着陸できるように祈りながら、ひさびさの日本のビールを片手に、機内食を味わう。

窓の外の夕焼けの雲海が、しみじみ感動的である。ナウシカが「メーヴェ」に乗って飛んできそうな美しい絵の世界が広がる。

<18:40> (台湾時間) <19:40> (日本時間) 名古屋空港 着

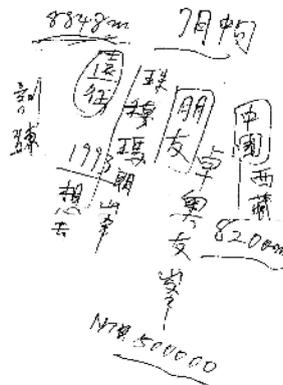
ロビーには、渡辺ファミリー、鮫島母、花房氏、三浦ファミリーが出迎えてくれる。

萌ちゃん、久しぶりの母さんに少し照れている。

渡辺隊長がしめくくりの言葉を述べて、ここで解散とする。

<20:15> 名古屋空港 解散

再見！



林さんの自筆